



館長だより

山形県産業科学館

令和 7 年 4 月 25 日(金)

発行 館長 加藤 智 一

ジャーネーの法則

2025. 4. 23 山形新聞「気炎」より

新聞には、「ジャーネーの法則」とありましたが、私は以前、「ジャーネーの法則」と聞いていたので、「ジャーネーの法則」とさせていただきます。「生涯のある、時期における時間の心理的長さは、年齢に反比例する。」「年少者にはより長く、年長者には短く感じられる。」という 19 世紀のフランスの哲学者ポール・ジャーネーが発案した法則です。

簡単に言うと、年齢が上がっていくにつれ、時間が早く過ぎるように感じるということです。この感覚は、おそらく、ある程度年齢を重ねたほぼすべての人が実感していることではないでしょうか。ジャーネーの法則では、50 歳の人 10 日間は 5 歳の人 1 日に当たることになります。つまり 10 倍の速さで月日が過ぎていくように感じるということです。時間の流れが早く感じる理由、「人生に占める時間の割合が変わるから」とする説があります。例えば、5 歳の子供にとって 1 年は人生の 5 分の 1。対して、20 歳の人にとって 1 年は人生の 20 分の 1。同じ 1 年でも人生に占める割合が異なるため、相対的に時間の流れが早く感じるというわけです。それでは、相対的に時間の流れが早く感じる理由はなぜなのでしょう。それは物事になれて、生活が単調になるからだと言われています。子供のころを思い出してみてください。知らないことばかりだったあなたは、好奇心に満ち溢れ、毎日新しい刺激にワクワクしていたはず。しかし、大人になるとそのような刺激になれ、好奇心は低下。仕事や家事など同じことを単調に繰り返してはいないでしょうか。新鮮味のない単調な毎日を繰り返した結果、時間の流れが早く感じてしまうのです。逆に言えば、最近時間の流れが早く感じるという人は、単調で面白みのない退屈な生活を送っているサインと言えそうです。

では、体感的に人生の半分を終えるのは何歳の時なのでしょう。3 歳をスタートとし、90 歳まで生きると仮定した場合、体感的に 20 歳前後で人生の半分を終えていることになります。時間の流れを長く感じるためには、子供時代のように積極的に新しい事にチャレンジし、楽しい予定をたくさん入れて「楽しみを待つ時間」を増やすように意識して生活することです。負担にならない程度に地域の役割を

担い、ボランティア活動に参加する、なんてのはどうでしょう。山形県産業科学館では、随時、ガイドボランティアを募集しています。時の過ぎゆく速度を少しは抑える効果があると思うのですが。



花笠の数がたりない ベトナムから救いの手

2025. 4. 23 朝日新聞より

東北を代表する夏祭りの一つ「山形花笠まつり」。実は昨夏、花笠の数が足りないという「事件」がおきていました。背景には材料であるスゲの生育不良と、笠の編み手の後継者不足です。

スゲの主な産地は飯豊町、尾花沢市、山形市です。ところがここ数年は高温や乾燥の影響で太く育たなかったそうなのです。茎が細いので、1 つの笠を作るのにより多くの本数が必要になり、作れる数が少なくなったというわけです。それにも増して深刻なのは作り手不足。農閑期の手仕事として笠作りが盛んな飯豊町の中津川地区では、高齢化が進み、10 年前に 15 人ほどいた編み手は、70～90 代の女性 5 人まで急減。かつては 1 万個作っていたものが、近年は 2 千個がやっとな状況だと言います。そこで新たな調達先として、山形市の「尚美堂」社長 逸見良昭氏がジェトロ山形に相談したところ、古賀健司所長がベトナムのハノイに駐在していた経験から、ベトナムで日常的に使われている円錐形の日よけ帽子「ノンラー」を思い出し、早速「ノンラー」の作り手が 200 人いて、年間 8 万個生産しているハノイ郊外のザイタイ村が候補にあがり、直接現地で花笠の編み方などの指導を行い、今年は 1500 個発注することになりました。今年の花笠は、メイド・イン・ベトナムの笠を手に入れた山形の踊り手が躍動することになりそうです。